

「死体験へようこそ」

—初稿—

2025/11/26

脚本 太郎

〈人物表〉

伴野 紡 ばんの (15)

高校一年生

伴野 貢 つぐみ (12)

紡の妹

伴野 繫 つなぎ (20)

伴野家長男。ニート

空井 空子 (15)

高校一年生。死体研究会部長

利岡 一 としおか はじめ (38)

教師

高城 充 (53)

変質者

1. (夢) 伴野家・リビングのドア前(夜)

伴野貢(12)の呻き声と、殴打の音。

伴野紡(15)、緊張した様子でドアを開ける。

2. (夢) 伴野家・リビング(夜)

奥で伴野繫(20)が貢に跨って、何度も殴打している。貢呻き声と殴打の音が響いている。

伴野がシンクの下引き出しから包丁を取る。

音を立てずに繫の方へ近づく。

包丁を振りかぶる。

その手が震えている。動かすことができない。

ギュツと目を瞑る。

3. 伴野家・伴野の自室(朝)

伴野、ベッドの上で勢いよく目を覚ます。

全身汗びっしょりである。

何度か荒い呼吸をし、

額の汗を拭うと、

悔しさを露わにして、思いつき横の壁を殴る。

4. 高校・部室棟・廊下(夕)

伴野、憂鬱そうな表情で歩いている。学生鞆と、手には数冊の本を抱えている。

本はどれも、人体の構造や人の殺し方に関わるもの。

開いた窓から一匹の蠅が入ってくる。

蠅、伴野の肩にとまる。

蠅 「(貢の声で)死んじゃえば？」

5. 高校・部室棟・死体研会部室・外觀(夕)

数ある部室の一つで、見かけ上は他と相違ない。

室名札には「死体研究会」とある。

伴野、ドアに近付いていく。

両側の壁一面に死体の写真や資料が貼られている。前方の壁にホワイトボード。その上の掛け軸、達筆で「万死一生」と書かれているが、「生」が×で消され、右に汚い字で「興」と書かれており、さらに末尾に汚い字で「（笑）」と書き加えられている。

後方の壁沿いには天井まで届くほどの本棚が幾つも。部室全体に雑然と並んだ机。

空井空子（15）、机の一つに座って本を読みながら、鉛筆でノートに何か書き込んでいる。深い隈がある。伴野が入室する。

空井、そちらに目を向けて、

空井 「伴野くん」

伴野、ドアを閉めて本棚の方へ向かう。

空井、鉛筆を机に置き、にやりと笑って、

空井 「何の用？」

伴野 「借りてた本返しに来た」

伴野、学生鞆を置き、本を本棚に戻していく。

伴野 「分かるでしょ。他にこんな場所に用なんてないよ」

空井、嬉しそうに、

空井 「その様子じゃタベも殺せなかったみたいだね、お兄さん」

伴野、振り返って空井を睨む。舌打ち。

伴野 「うるっさいよ、空井さん」

空井 「こっわ。そんな顔してると幸せが逃げるよ」

伴野 「放っとけよ」

伴野、辟易した顔で辺りを見回し、

伴野 「大体幸せなんてこんな場所にハナから寄ってこないだろ」

空井 「こんな夢と希望に溢れた場所なの？」

伴野 「眼科行けよ」

空井 「伴野くん、死体の良さが分からないなんて人生損してる」

伴野 「眼科行つた帰りに心療内科もハシゴした方が良さそうだ」

空井、呆れたように首を振って、

空井 「君とは分かり合えないな」

伴野 「こっちの台詞だけど。一体どう育てられたら死体なんか

好きになるんだよ」

空井、過去を思い返すような表情。

空井 「実はわたし、物心ついてから10年くらい死体と暮らしてた時期があるんだけどね」

伴野 「どんな時期だよ」

空井 「それでね」

伴野、焦った様子で片手を前に出して、

伴野 「待った。自分から訊いって何だけどその先は聞きたくない。今以上に寝覚めが悪くなりそうだし」

空井 「あっそう？ ちなみに死体のどこが好きかと言うと、硬くて細長くてうるさくなくて動かないところ」

伴野 「それ電柱とかじゃダメなの？」

空井 「断固ダメだよ」

伴野 「やっぱダメなんだ」

空井、呆れた様子で、

空井 「はあ。これだから生きた人間は。あーあ、また死体と暮らしたいな」

伴野、軽い調子で、

伴野 「ならいつそ君も死体になれば良いんじゃないか」

空井、「その手があったか」といった顔。

伴野、ギョツとする。

空井、鼻で笑って、

空井 「ところで次は？」

伴野 「え？」

空井 「何の本借りる？」

伴野 「あ、ああ」

伴野、屈んで本棚を見、指で本の列をなぞっていく。

空井 「まあ正直、こんなことして意味あるのか謎だけど」

伴野の動きが止まる。

伴野 「うるさいな」

空井 「夢に出てくるお兄さんを殺したいから死体と殺人の勉強してる人なんてきつと人類初だよ。マジで謎」

× × ×

(フラッシュ) 貢を殴る繋。

× × ×

伴野、振り返って、楽し気な顔の空井を睨み、
伴野 「うるさいって言ってるんだろ」

空井 「夢の中でお兄さん殺してもどうにもなんないよ」

× × ×

（フラッシュ） 貢を殴る繋。

× × ×

伴野 「黙れよ。ウザいんだよお前」

空井 「妹さんも帰ってこない」

× × ×

（フラッシュ） 繋に殴られる貢。

× × ×

伴野 「黙れつつてんだろ、怒るぞ！」

伴野、本棚を思い切り蹴る。

本が何冊も落ちる。

空井、嘔き出す。

空井 「こっわ。もうキレてんじゃない」

伴野、溜息。

伴野 「何なんだ君は。ぼくを煽って何がしたいんだ？」

空井、ふと思いついたように、

空井 「てか伴野くんさあ」

伴野 「何だよ今度は」

空井 「いっその流れで殴り合いしない？」

伴野、驚きでポカンとして、

伴野 「何でだよ……何で同じ言語使っててこんなに会話が成り立たないんだよ」

空井 「だって本ばかり読んで実践したことないでしょ？」

伴野 「今は部活で散々しごかれてるって」

空井 「空手なんて実戦とは言えないでしょ。そんなのよりさ、実際に殺す殺されるの空気に身を置いた方がさ、少しは効果あるんじゃない？」

伴野 「ちよっと待って、君殺す気で来ようとしてんの？」

空井、鉛筆を持って伴野に突進してくる。

空井 「うん！」

伴野、恐怖に駆られて身構える。

空井、思いきり鉛筆を振り下ろす。

伴野、間一髪でそれを避ける。

空井の肩と鉛筆を持った手を押さえる。

空井、楽しそうな笑い声をあげる。

伴野 「馬鹿お前やめろって……てかこれ殴り合いじゃねーだろ」

鉛筆の先が伴野の目に近付いていく。

伴野 「マジで……あつ……たまおかしいんじゃないのか！」

伴野、耐えかねたように空井を突き飛ばす。

空井、勢いよく床に倒れる。凄い音。鉛筆が転がる。

伴野、ギョツとして空井を見る。

空井は動かない。

伴野 「空井さん？」

空井の反応はない。

伴野、引き攣った表情で空井に近付く。

伴野 「大丈夫？」

直後に空井、勢い良く起き上がる。

空井 「どすこいッ！」

伴野、悲鳴を上げて飛びのく。

空井、けらけらと笑って立ち上がる。

空井 「今マジで死んだと思っ——」

銃声が鳴る。二人、同時に悲鳴を上げて飛びのく。

空井 「何何何、何よ？」

7.

高校・外観（夕）

断続的に銃声が鳴る。校舎のあちこちから悲鳴。

校内放送のチャイムの音。

8.

高校・部室棟・死体研究会部室（夕）

放送の声 「只今校内に猟銃を持った全裸の不審者が侵入しました」

空井 「やっぱ」

伴野 「え、嘘……これって訓練とかじゃ」

放送の声 「訓練じゃないです」

伴野 「いや返事返ってくるのはおかしいだろ」

9. 高校・放送室（夕）

何人かの生徒たちが隅の方で震えている。

利岡一（38）、マイクに向け熱心に話している。

利岡 「大変な状況ですが、皆さん慌てず、落ち着いて、冷静な判断で行動しましょう」

銃声が鳴る。放送室の内外で悲鳴が上がる。

利岡 「廊下を走ることなく、校則を犯すことなく、集団行動を維持し、犯人と出くわしても暴力をふるったりせず――」

10. 高校・部室棟・死体研究会部室（夕）

放送の声 「我が校の生徒としてあくまで模範的に避難して下さい」

伴野 「いや無理だろ」

11. 高校・放送室（夕）

銃声、徐々に近づいてきている。

放送室内の生徒たちは腰を抜かして恐慌状態。

放送室の外からも悲鳴や激しい足音が絶えない。

利岡 「ですから皆さん、落ち着いてください。落ち着いてくださいってば！」

利岡、悔し気に放送パネルを拳で叩き、

利岡 「クソッ！ 皆どうすれば落ち着いてくれるんだ」

利岡、食い気味になり、

利岡 「お願いです、どうか落ち着いてください、落ち着いてください、落ち着いてください、落ち着いてください」

息を切らせた直後、何かを思いついた顔になる。

利岡 「そうだ」

12. 高校・部室棟・死体研究会部室（夕）

放送の声 「今から先生が、風流で趣深めの自作短歌を詠みます。

皆それを聞いて心を落ち着けましょう」

伴野 「何でだよ」

空井、感心した様子で、

空井 「おお、ここで一首」

伴野 「意味不明すぎてはてなマークの化身になりそうだよ」
空井 「意味不明が連鎖してるけど」

13. 高校・放送室（夕）

勢いよくドアが開く。

高城充（53）が全裸で猟銃を持って現れる。

生徒たちの悲鳴。

高城 「皆さん、生きないでください！」

利岡 「え？」

高城 「生存は魂の墮落なんです。お願いです、どうか生きないでください！ 生きないでください、生きないでください、生きないでください、生きないでください！」

猟銃を構え、

高城 「生きないでくださいってばあ！」

14. 部室棟・死体研究会部室（夕）

生の音とスピーカーから同時に銃声。放送が切れる。

銃声が続く。

空井、少し考えて、

空井 「あ、字足らずか」

伴野 「いやもはや虚無だろこれ」

伴野、ドアに視線をやって、

伴野 「てかそんなこと言ってないでぼくらも逃げないと」

空井、何か思いついたように手を打つ。

空井 「これアレだね、チャンスだね」

伴野 「は？」

空井 「実戦のチャンスだよ。悪い奴ぶっ殺して場数踏もうよ」

伴野 「何でよりによって最悪の状況で最悪の提案すんの君」

空井 「大丈夫大丈夫、空手だってやってんでしょ？」

伴野 「いやそんなの始めたばっかだし、大体銃相手じゃ……」

空井 「じゃあ武器貸してあげるよ」

空井が伴野に鉛筆を渡す。

伴野、神妙な表情で手に持った鉛筆を見る。

伴野 「これアレだね」

伴野が空井を見る。

伴野

「分が悪いね」

一際大きく銃声が鳴る。

終